

# 身近にある人助け

弘前市立第一中学校 三年 成田 威颯

私たちは普段、困っている人を助ける場面にたくさん出会うわけではありません。けれど、学校や地域で助け合いを感じることはあります。

例えば、学校で友だちが忘れ物をしてしまったときに貸してあげること。疲れている仲間に「大丈夫？」と声をかけること。そんな小さな行動でも受け取った側は安心したり、元気を取り戻したりします。助け合いは特別なことではなく、日常の中にたくさんあるのだと気づきました。

赤い羽根共同募金も、その延長にあると考えます。少しの金額でもたくさんの協力が集まると、大きな力になり、困っている人の生活を支えることができます。募金の使い道を調べてみると、主に地域福祉活動への助成、災害時の支援、そして企業の社会貢献活動の推進など、本当にさまざまなことに役立てられていました。ニュースやネットなどで自然災害が起きたとわかったとき、募金のお金が被災地の人々の役に立ったことを知り、私たちの小さな気持ちが大きな力になるということがわかりました。

これからの社会は、一人だけで生きていくことはほとんど不可能だと考えます。少子高齢化問題や自然災害、貧困など、さまざまな問題があるからです。そんなときこそ、助け合いの心を持ち続けることが大切だと考えます。私はまだ中学生で、大きなことができるわけではありません。でも、募金に参加したり、友だちを思いやったりすることはできます。だからこそ、その小さな一歩を大切にしたいです。

赤い羽根の募金箱にお金をいれるとき、私たちは「このお金がどこかで誰かを助けますように」と心の中で願います。この募金で少しでも人の役に立てるなら、とても尊いことだと考えます。助け合いは、自分も相手も笑顔にする力を持っています。

これから先、私は中学生としてできることを精一杯やっていきたいと思いません。募金やボランティアだけでなく身近な家族や友人を思いやることも、立派な助け合いだと考えます。そうした行動を積み重ねていき、いつか大人になったときには、より多くの人たちを支えられるような存在になりたいです。助け合いの心を絶対に忘れず、社会に少しでも貢献できる人間になること。このことを、赤い羽根共同募金を通して考えました。